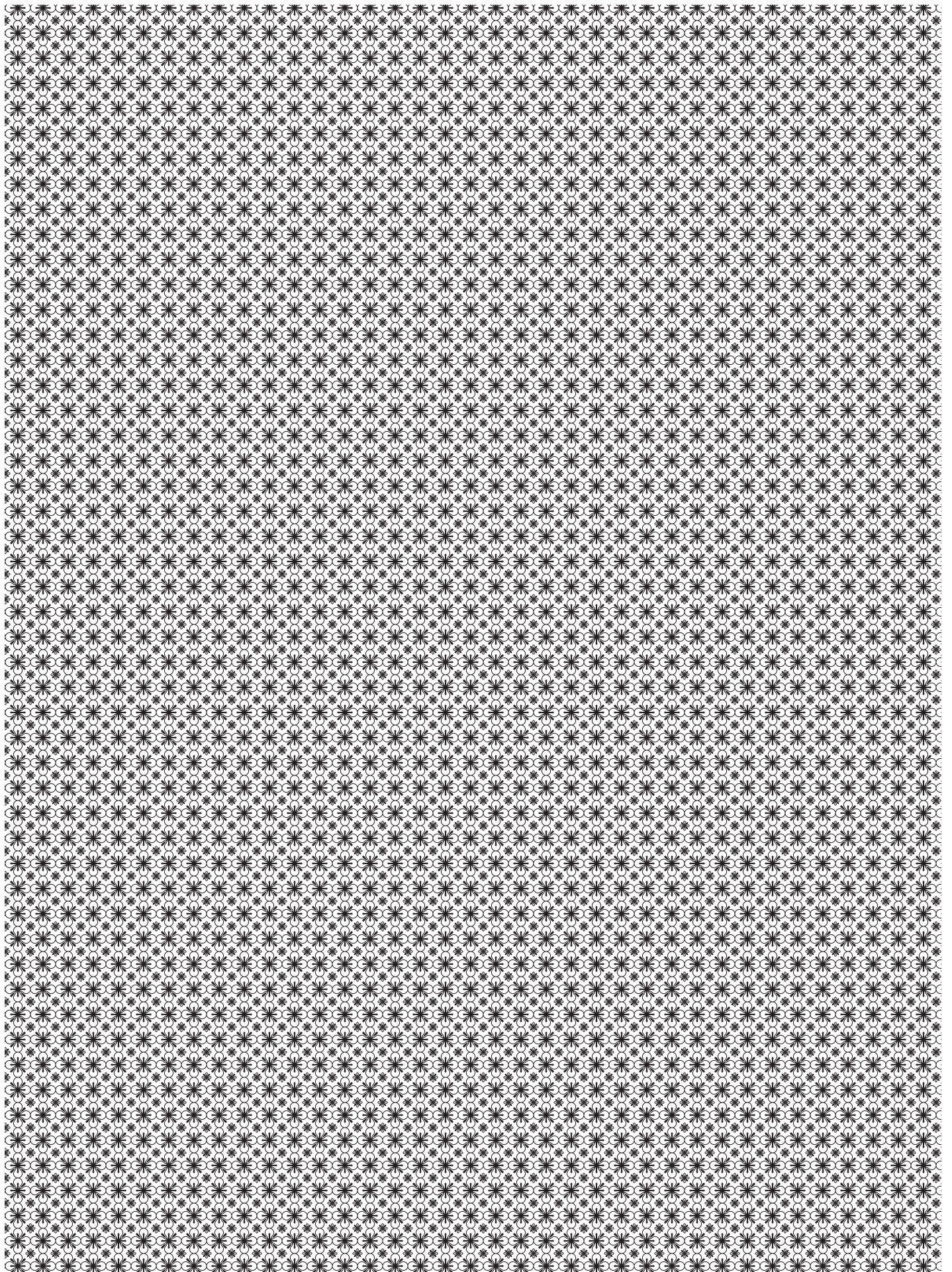


国語



〔問 1〕 例文の傍線部の意味として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

【例文】 やはり情けは人のためならずと言うのは本当だ。

- 1 人に親切にしておけば、それが巡り巡って必ず自分によい報いがある。
- 2 人に簡単に手を差し伸べないのは、その人の自力での成長を期待しているからである。
- 3 人に愛情や憎しみを抱くのは、結局は自分のことを大切だと思っている証である。
- 4 人に何らかの感情をもつと、やはり先に抱いた側が思い悩むことになる。
- 5 人に自分の情けない姿を見せると、心をひらいたと感じてもらえる。

〔問 2〕 次の四字熟語の意味として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

【不俱戴天】

- 1 周りの人々の気持ちを考慮せず、のさばること。
- 2 目上目下の区別はないと考え、重んじること。
- 3 地上に降りた天人を見るように、憧れること。
- 4 共に生きてはいけな**い**と思うほど、恨むこと。
- 5 自分の力が秀でていると感じ、鼻にかけること。

〔問 3〕 例文の傍線部と同じ漢字を用いるものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

【例文】 バイオリニストがセンサイな音楽を紡ぎ出す。

- 1 市場でシンセンな魚介類を購入する。
- 2 積極的に食物センイを摂取する。
- 3 体育祭で選手センセイをする。
- 4 航空機が右方向にセンカイする。
- 5 ガスのモトセンをしっかりとしめる。

〔問 4〕例文の傍線部の意味として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

【例文】世界にアプリオリに存在しているもの。

- 1 熱狂的
- 2 集中的
- 3 先天的
- 4 後天的
- 5 先端的

〔問 5〕敬語の使い方として適切ではないものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 (先生に対して)「来週、改めて先生のお宅へ伺います。」
- 2 (手紙の送り主に対して)「一昨日、お手紙を拝見しました。」
- 3 (上司に対して)「粗末なものです、お召し上がりください。」
- 4 (お客様に対して)「この荷物は、私がお持ちします。」
- 5 (お客様に対して)「珈琲はホットとアイス、どちらにいたしますか。」

いちと言った。「じゃあ、お起き、著物を着せてあげよう。長さんは小さくても男だから、いつしよに行ってくれば、そのほうがいいのよ」と言った。

女房は夢のようにあたりの騒がしいのを聞いて、少し不安になって寝がえりをしたが、目はさめなかつた。

三人の子供がそと家を抜け出したのは、二番鶏の鳴くころであった。戸の外は霜の曉であった。提灯を持って、拍子木をたたいて来る夜回りのじいさんに、お奉行様の所へはどう行ったらゆかれようと、いちがたずねた。じいさんは親切な、物わりのいい人で、子供の話をはじめに聞いて、^{※3}月番の西奉行所のある所を、丁寧^{にじぶきようしよ}に教えてくれた。当時の^{※4}町奉行は、東が稲垣淡路守種信で、西が佐佐又四郎成意である。そして十一月には西の佐佐が月番に当たっていたのである。

じいさんが教えているうちに、それを聞いていた長太郎が、「そんなら、おいらの知った町だ」と言った。そこで姉妹は長太郎を先に立てて歩き出した。

ようよう西奉行所にたどりついて見れば、門はまだ締まっていた。門番所の窓の下に行つて、いちが「もしもし」とたびたび繰り返して呼んだ。しばらくして窓の戸があいて、そこへ四十格好の男の顔がのぞいた。「やかましい。なんだ。」

「お奉行様にお願いがあつてまいりました」と、いちが丁寧に腰をかがめて言った。

「ええ」と言ったが、男は容易にことばの意味を解しかねる様子であつた。

いちはまだ同じ事を言った。

男はようようわかつたらしく、「お奉行様には子供が物を申し上げることはできない、親が出て来るがいい」と言った。

「いいえ、父はあしたおしおきになりますので、それについてお願いがございます。」

「なんだ。あしたおしおきになる。それじゃあ、お前は桂屋太郎兵衛の子か。」

「はい」といちが答えた。

「ふん」と言つて、男は少し考えた。そして言つた。「けしからん。子供までが上を恐れんと見える。お奉行様はお前たちにお会いはない。帰れ帰れ。」こつ言つて、窓を締めてしまった。

まつが姉に言つた。「ねえさん、あんなにしかるから帰りましょう。」

いちと言つた。「黙つておいで。しかられたつて帰るのじゃありません。ねえさんのするとおりにしておいで。」こつ言つて、いちが門の前にしゃがんだ。まつと長太郎とはついてしゃがんだ。

三人の子供は門のあくのをだいぶ久しく待つた。ようよう^{※5}貫木をはずす音がして、門があいた。あけたのは、先に窓から顔を出した男である。

いちが先に立つて門内に進み入ると、まつと長太郎とが後ろに続いた。

いちの態度があまり平気なので、門番の男は急にささえとどめようとせせずいた。そしてしばらく三人の子供の玄関のほうへ進むのを、目をみはつて見送っていたが、ようよう我れに帰つて、「これこれ」と声をかけた。

「はい」と言つて、いちはおとなしく立ち留まつて振り返つた。

「どこへゆくのだ。さつき帰れと言つたじゃないか。」

「そうおっしゃいましたが、わたくしどもはお願いを聞いていただくまでは、どうしても帰らないつもりでございます。」

「ふん。しぶといやつだな。とにかくそんな所へ行つてはいかん。こつちへ来い。」

子供たちは引き返して、門番の^{※6}詰所へ来た。それと同時に玄関わきから、「なんだ、なんだ」と言つて、二三人の詰衆が出て来て、子供たちを取り巻いた。いちとはほとんどこうなるのを待ち構えていたように、そこにうづくまって、懐中から書付を出して、まっ先にいる^{※7}与力の前にさしつけた。まつと長太郎ともいっしょにうづくまって礼をした。

書付を前へ出された与力は、それを受け取つたものか、どうしたものかと迷うらしく、黙つていちの顔を見おろしていた。

「お願いでございます」と、いちが言った。

「こいつらは木津川口でさらし物になつてゐる桂屋太郎兵衛の子供でございます。親の命乞いをするのだと言つています」と、門番がかたわらから説明した。

与力は同役の人たちを顧みて、「ではとにかく書付を預かつておいて、伺つてみることにしましょうかな」と言った。それにはたれも異議がなかつた。

与力は願書をいちの手から受け取つて、玄関にはいった。

西町奉行の佐佐は、両奉行の中の新参で、大阪に来てから、まだ一年たつていない。役向きの事はすべて同役の稲垣に相談して、^{※8}城代に伺つて処置するのであつた。それであるから、桂屋太郎兵衛の^{※9}公事について、前役の申し継ぎを受けてから、それを重要事件として気にかけていて、ようよう処刑の手續きが済んだのを重荷をおろしたように思つていた。

そこへけさになつて、宿直の与力が出て、命乞いの願ひに出たものがあると言つたので、佐佐はまずせつかく運ばせた事に邪魔がはいつたように感じた。

「参つたのはどんなものか。」佐佐の声はふきげんであつた。

「太郎兵衛の娘兩人と伴とがまいりまして、年上の娘が願書をさし上げたいと申しますので、これに預かつております。御覧になりましょうか。」

「それは^{※10}目安箱をもお設けになつておる御趣意から、次第によつては受け取つてもよろしいが、一応はそれぞれ手續きのあることを申し聞かせんではなるまい。とにかく預かつておるなら、内見しよう。」

与力は願書を佐佐の前に出した。それをひらいて見て佐佐は不審らしい顔をした。「いちというのがその年上の娘であるうが、何歳になる。」

「取り調べはいたしません、十四五歳ぐらいに見受けまします。」

「そうか。」佐佐はしばらく書付を見ていた。ふつつかなかな文字で書いてはあるが、条理がよく整つていて、おとなでもこれだけの短文に、これだけの事がらを書くのは、容易であるまいと思われるほどである。おとなが書かせたものではあるまいかという念が、ふときざした。続いて、上を偽る横着物の所為ではないかと思議した。それから一応の処置を考えた。太郎兵衛は明日の夕方までさらすことになつてゐる。刑を執行するまでには、まだ時がある。それまでに願書を受理しようとも、すまいとも、同役に相談し、上役に伺うこともできる。またよしやその間に情偽があるとしても、相当の手續きをさせるうちには、それを探ることもできよう。とにかく子供を帰そうと、佐佐は考えた。

そこで与力にはこう言つた。この願書は内見したが、これは奉行に出されぬから、持つて帰つて^{※11}町年寄に出せと言つた。

与力は、門番が帰そうとしたが、どうしても帰らなかつたということを、佐佐に言った。佐佐は、そんなら菓子でもやって、^{※12}すかして帰せ、それでもきかぬなら引き立てて帰せと命じた。

与力の座を立ったあとへ、城代太田備中守資晴がたずねて来た。正式の見回りではなく、私の用事があつて来たのである。太田の用事が済むと、佐佐はただ今かようかよの事があつたと告げて自分の考えを述べ、さしずを請うた。

太田は別に思案もないので、佐佐に同意して、午過ぎに東町奉行稲垣をも出席させて、町年寄五人に桂屋太郎兵衛が子供を召し連れて出させることにした。情偽があるかという、佐佐の懸念ももつともだというので、^{※13}白州へは^{※14}責め道具を並べさせることにした。これは子供をおどして実を吐かせようという手段である。

ちようどこの相談が済んだところへ、前の与力が出て、入り口に控えて^{※15}気色を伺つた。

「どうじゃ、子供は帰つたか」と、佐佐が声をかけた。

「御意でござりまする。お菓子をつかわしまして帰そうといたしましたしたが、いちと申す娘がどうしてもききませぬ。とうとう願書をふところへ押し込みまして、引き立てて帰しました。妹娘はしくしく泣きましたが、いち泣かずに帰りました。」

「よほど情のこわい娘と見えますな」と、太田が佐佐を顧みて言った。

十一月二十四日の^{※16}末の下刻である。西町奉行所の白州ははればれしい光景を呈している。^{※17}書院には両奉行が列座する。奥まつた所には別席を設けて、表向きの出座ではないが、城代が取り調べの模様をよそながら見に来ている。縁側には取り調べを命ぜられた与力が、書役を従えて着座する。

^{※18}同心らが^{※19}三道具を突き立てて、いかめしく警固している庭に、拷問に用いる、あらゆる道具が並べられた。そこへ桂屋太郎兵衛の女房と五人の子供とを連れて、町年寄五人が来た。

尋問は女房から始められた。しかし名を問われ、年を問われた時に、^{※20}かつがつ返事をしたばかりで、そのほかの事を問われても、「いっとうに存じませぬ」「恐れ入りました」と言うよりほか、何一つ申し立てない。

次に長女いちが調べられた。当年十六歳にしては、少し幼く見える、瘦肉の小娘である。しかしこれはちとの臆する気色もなしに、一部始終の陳述をした。祖母の話を物陰から聞いた事、夜になって床に入ってから、出願を思い立った事、妹まつに打ち明けて勧誘した事、自分で願書を書いた事、長太郎が目をさましたので同行を許し、奉行所の町名を聞いてから、案内をさせた事、奉行所に来て門番と応対し、次いで詰衆の与力に願書の取次を頼んだ事、与力らに強要せられて帰つた事、およそ前日来経歴した事を問われるままに、はつきり答えた。

「それではまつのはかにはだれにも相談はいたさぬのじゃな」と、取調役が問うた。

「だれにも申しません。長太郎にもくわしい事は申しません。おとつさんを助けていただくように、お願いしに行くとお申しただけでございます。お役所から帰りまして、年寄衆のお目にかかりました時、わたくしども四人の命をさしあげて、父をお助けくださるよう願うのだと申しましたら、長太郎が、それでは自分も命がさしあげたいと申して、とうとうわたくしに自分だけのお願書を書かせて、持ってまいりました。」

いちがこう申し立てると、長太郎がふところから書付を出した。

取調役のさしずで、同心が一人長太郎の手から書付を受け取って、縁側に出した。

取調役はそれをひらいて、いちの願書と引き比べた。いちの願書は町年寄の手から、取り調べの始まる前に、出させてあったのである。

長太郎の願書には、自分も姉や弟妹といっしょに、父の身代わりになって死にたいと、前の願書と同じ手跡で書いてあった。

取調役は「まつ」と呼びかけた。しかしまつは呼ばれたのに気がつかなかった。いちが「お呼びになったのだよ」と言った時、まつは始めておそろおそろうなだれていた頭をあげて、縁側の上の役人を見た。

「お前は姉といっしょに死にたいのだな」と、取調役が問うた。

まつは「はい」と言つてうなずいた。

次に取調役は「長太郎」と呼びかけた。

長太郎はすぐに「はい」と言った。

「お前は書付に書いてあるとおりに、兄弟いっしょに死にたいのじゃな。」

「みんな死にますのに、わたしが一人生きていたくはありません」と、長太郎ははっきり答えた。

「とく」と取調役が呼んだ。とくは姉や兄が順序に呼ばれたので、こん度は自分が呼ばれたのだと気がついた。そしてただ目をみはって役人の顔を仰ぎ見た。

「お前も死んでもいいのか。」

とくは黙つて顔を見ているうちに、くちびるに血色がなくなつて、目に涙がいつぱいたまつて来た。

「初五郎」と取調役が呼んだ。

ようよう六歳になる末子の初五郎は、これも黙つて役人の顔を見たが、「お前はどうか、死ぬるのか」と問われて、活発にかぶりを振つた。書院の人々は覚え、それを見てほへえんだ。

この時佐佐が書院の敷居ざわまで進み出て、「いち」と呼んだ。

「はい。」

「お前の申し立てにはうそはあるまいな。もし少しでも申した事に間違いがあつて、人に教えられたり、相談をしたりしたのなら、今すぐに申せ。隠して申さぬと、そこに並べてある道具で、誠の事を申すまで責めさせるぞ。」佐佐は責め道具のある方角を指さした。

いちはさされた方角を一目見て、少しもたゆたわずに、「いえ、申した事に間違いはございません」と言い放つた。その目は冷ややかで、そのことは徐かであった。

「そんなら今一つお前に聞かすが、身代わりをお聞き届けになると、お前たちはすぐに殺されるぞよ。父の顔を見ることはできぬが、それでもいいか。」

「よろしゅうございます」と、同じような、冷やかな調子で答えたが、少し間を置いて、何か心に浮かんだらしく、「お上の事には間違いはございませんから」と言い足した。

佐佐の顔には、不意打ちに会つたような、驚愕の色が見えたが、それはすぐに消えて、険しくなった目が、いちの面に注がれた。憎悪を帯びた驚異の目でも言おうか。しかし佐佐は何も言わなかつた。

次いで佐佐は何やら取調役にささやいたが、まもなく取調役が町年寄に、「御用が済んだから、引き取れ」と言い渡した。

白州しらすを下がる子供らを見送って佐佐は太田と稲垣とに向いて、「生先おいひの恐ろしいものでござりますな」と言った。心の中には、哀れな孝行娘の影も残らず、人に教唆きょうさせられた、おろかな子供の影も残らず、ただ氷のように冷やかに、刃やいばのように鋭い、いちの最後のことばの最後の一句が反響しているのである。^{※21}元文げんぶんごろの徳川家の役人は、もとより「^{※22}マルチリウム」という洋語も知らず、また当時の辞書には献身けんしんという訳語もなかったもので、人間の精神に、老若男女らうじやくなんにょの別なく、罪人太郎兵衛の娘に現われたような作用があることを、知らなかったのは無理もない。しかし献身けんしんのうちに潜む反抗はんかの鋒ほしは、いちとことばを交えた佐佐のみではなく、書院しよゐんにいた役人一同の胸をも刺した。

(森鷗外『最後の一句』より)

- ※1 平野町：現在の大阪府中央区にある地名。
- ※2 お奉行様：「奉行」は、武家における職名。ここでは、大阪の行政・司法・警察など民政全般をつかさどる大阪町奉行を指す。
- ※3 月番の西奉行所：大阪奉行所は東西に分かれ、一か月交替で執務にあたった。
- ※4 町奉行：※2参照。
- ※5 貫木：門の扉を開かないようにするための横木。かんぬき。
- ※6 詰所：特定の勤務の人が集まって控えている所。
- ※7 与力：江戸時代の職名。奉行などに従属し、その補佐をする。
- ※8 城代：江戸時代の職名。大阪城に常置され、政務をつかさどる。
- ※9 公事：ここでは、訴訟のこと。
- ※10 目安箱：享保六（一七二一）年、将軍が設置した、庶民の進言・不満などを投書させる箱。
- ※11 町年寄：江戸時代の職名。町奉行に従属し、収税などを行う町役人。
- ※12 すかして：だまして。なだめすかして。
- ※13 白州：奉行所の法廷の一部で、裁きを受ける庶民が控える場所。
- ※14 責め道具：拷問に用いる道具。
- ※15 気色：様子。
- ※16 未の下刻：午後二時二十分から三時頃。下刻は一時（二時間）を三分割した最後。
- ※17 書院：居間あるいは書齋として用いた部屋。ここでは、白州に対して佐佐らのいる所を指す。
- ※18 同心：江戸時代の職名。与力に従属し、庶務・警察事務を扱う。
- ※19 三道具：江戸時代、罪人を捕らえる際に用いた突棒・刺股・袖搦そでがらみの三つをいう。
- ※20 かつがつ：やつのこと。ともかく。
- ※21 元文：江戸時代、八代将軍徳川吉宗の治世。いちの父、桂屋太郎兵衛の斬罪の決まったのは元文三年（一七三八年）と原典に記載されている。
- ※22 マルチリウム：献身。自己犠牲。もとはキリスト教で殉教を指す。

〔問 6〕傍線部Ⅰ「自分はそれを殺させぬようにすることができる」とあるが、そのように「いち」が考える理由として最も適当なものを次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 以前、身代わりを立てれば罪人が救われた話をおばあ様から聞いたことがあるから。
- 2 自分のような賢い子供がきちんと理路を考えているので、失敗するはずがないから。
- 3 町年寄と子どもが自分たちの命を犠牲にしてお願いするので、お奉行様も恐れるはずだから。
- 4 子どもたちが身代わりになるほどの願いならば、お奉行様も聞き届けてくれるはずだから。
- 5 大人しか書けない願書を持参して交渉するので、お奉行様も周囲も同情してくれるはずだから。

〔問 7〕傍線部Ⅱ「こわいわねえ」とあるが、その内容として最も適当なものを次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 お家存続のために長太郎だけは殺さぬように事を遂行しようとする「いち」のしたたかさを恐れている。
- 2 穏健な考えの祖母や母とは真逆の行動を取ろうとする「いち」の強気の状態を恐れている。
- 3 自分を犠牲にしているように見せかけて権力に刃向かう「いち」の反骨精神を恐れている。
- 4 お奉行様を相手にしてもひるまず自分の意見を通そうとする「いち」の傲慢さを恐れている。
- 5 父のために自分たちが死ぬかもしれないことやそんな計画を立てる「いち」の強引さを恐れている。

〔問 8〕傍線部Ⅲ「何か心に浮かんだ」とあるが、その内容として最も適当なものを次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 町奉行の役人たちが嘘をついていて、すでに父は殺されているのではないか、という不安が頭をよぎった。
- 2 ことによれば自分たちの死後、お上がこの約束を守らないのではないかという一抹の疑念が頭をよぎった。
- 3 近いうちに特赦が行われるという噂を思い出し、それを守ってもらいたいという気持ちが頭をもたげた。
- 4 子どもたちの中で誰が父の身代わりになるのか、確認をとったほうがよいという気持ちが頭をもたげた。
- 5 そもそも父への罪科が使用人の罪に巻き添えになっただけで、父は無罪だという気持ちが頭をよぎった。

〔問 9〕傍線部Ⅳ「献身のうちに潜む反抗の鋒」とは、どのようなことか。内容として最も適当なものを次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 蛇足にも思える余計な一句を敢えて口にしてしまう町人の大胆さ。
- 2 嘘についても周囲の信頼を得ることで勝利を得ようとする貪欲さ。
- 3 理想のためには自己犠牲もいとわずに強者にあらがうひたむきさ。
- 4 自らを犠牲にしてまでも権力側の不正をあばこうとする正義感。
- 5 自分を犠牲としているように見せつつ好んで権力に刃向かう反骨精神。

〔問 10〕傍線部Ⅴ「書院にいた役人一同の胸をも刺した」のは、なぜか。理由として最も適当なものを次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 権力というものの現実を見破られ、激しく動揺したから。
- 2 若い娘の勝手気ままな言動に、権力の崩壊を感じたから。
- 3 自らの死を潔く承った娘の態度に、真の孝行を見たから。
- 4 お上に対し全く疑問を持たない素直さに心打たれたから。
- 5 新参奉行を感激させる言葉なら猶更古参の者へ響くから。

〔問題〕次の文章を読み、後の〔問 11〕～〔問 15〕に答えなさい。

自分自身を知ろうとするとき人間は鏡の前に立ちます。全体としておかしくないか、見ようとするときは、相当に離れたところに立ってみると、全体は見る事ができない。自分の生きている社会を見るとときも同じです。いつた人は離れた世界に立ってみる。外に出てみる。遠くに出てみる。そのことによって、ぼくたちは空気のよう¹に自明（あたりまえ）だと思つてきたさまざまなことが、（あたりまえではないもの）として、見えてくる。演劇の好きな人は、「^{※1}異化効果」という、^{※2}ブレヒトの言葉を思い出すでしょう。社会学、特に比較社会学の意味は、ぼくたちが生きていく上で「あたりまえ」だと思ひ込んでいるさまざまなことを、（あたりまえではないもの）として、新鮮なもの、異様なもの、驚きに充ちたものとして、見せてくれるということです。社会学のキーワードでいうと、〈自明性の罫からの解放〉ということです。

インドやメキシコやブラジルに行った日本人は、その国が大きらしいになるか、大好きになるかどちらかが多い。商社マンなどでこういう国に派遣された人が、もういやで仕方がない。早く日本に帰りたい。あるいはアメリカとかヨーロッパの支店に行きたい。と思つている人はたくさんいます。ぼく自身は大好きになった少数派ですが、きらいになった人の気持ちはよくわかる。きらいになることの理由はよくわかる。しかしどうして自分が好きになったかということは、よくわからない。日本に帰つて「どうだった？」と聞かれて、話すことはほとんど、困つたことや不便なこと、ひどいこととか危なかつたことです。

ひとつだけ最初に行ったときの話をすると、絵描きの卵とか音楽評論家の卵みたいな人たちと五人で、^{※3}デリーから朝の列車で^{※4}ベナレス（ヴァラナシ）に行くつもりだった。インドの列車はデッキの手すりや窓枠の外まで人がぶら下がっているくらい超満員のことは知っていたから、六時くらいから早く行つて待つていた。デリーも一二月の早朝は、そうとう寒いのです。^{※5}ボンベイ（ムンバイ）でジーンズの腰から下をはきみで切つて捨ててしまつてかっこよかつた男の子などは、唇を紫色にしてふるえている。八時に列車の来る時間になると構内放送があつて、一時間おくれるという。「ええっ」といつて驚いているのはぼくたちだけで、まわりのインド人は泰然として坐つてゐる。九時になるともう一度構内放送があつて、あと一時間おくれるという。一〇時になるとまた構内放送があつて、今日は取りやめにしたという。ベナレスで予定していたその日の行動スケジュールは全部だめ。途方に暮れているのは今度もぼくたちだけで、まわりにいっぱいいたインド人は静かに潮を引くように、ホームには誰もいなくなつてゐる。あとになつてふり返つてみると、この〈途方にくれる〉というところから、ぼくたちのインドの旅は始まつていた。そのときの旅は結局、翌年からのメキシコでの仕事とならんで、ぼくの生涯の決定的な転換点のひとつとなつたのですが、もしもこの「途方にくれる」ということがなくてスケジュール通りに運んでいたら、ヨーロッパやアメリカの旅行と同じ、これもひとつの旅行にすぎなかつたと思う。旅と旅行は、ちがうのです。

けれどもそれは後になつてから思うことで、その時はほんとうに途方にくれる。

「3K」といふことばがあつて、「キツイ、キタナイ、キケン」という、現代の日本の若者がきらう三つのことですが、これらの国々の旅の話は、まさに3Kのことばかりです。それできらいになつたのだらうと聞かれると、ふしぎな魅力で、好きになつてゐる。これは矛盾です。ふしぎその一、といつていい。

矛盾といへば、もう一つふしぎなことがある。インドに一週間くらいいると、もう一年もインドを旅しているような気になる。三週間もいると、一〇年くらいここにいるというか、日本にいたところが「前世」のような、少なくとも「前半生」であつたような気になる。これは最初の時だけ

でなく、二回目も三回目も、いつもそうでした。ヨーロッパとかアメリカでは、決してそのような気分にならない。日本と同じように時間が流れる。このことはとても奇妙なことで、インドはものすごく非能率です。チケットを一枚買うのに半日も並んだりする。午前中にはこれとこれ、午後にはあそことあそこに行こうと決めていても、そのうちの二つか二つで日が暮れてしまう。やれることはとても少ないのに、長くいたという気がする。数学的にいって矛盾です。ふしぎ第二としておこうと思います。

ブラジルの^{※6}リオ・デ・ジャネイロの^{※7}カーニバルの主役たちはファベラという、スラム街の貧しい人たちで、日本人は入ったら身ぐるみはがれるとか殺されるとか言って、領事館の人から止められたのですが、このファベラに住みついて住民と仲良くしている日本人がいて、その人に案内されてとても楽しい一日を過ごしたのですが（「ファベラの薔薇」という文章にその日のことを書きました）、その住みついている日本人はもと日本テレビで、看板番組も手がけていた花形プロデューサーでした。

ラテンアメリカは日本の漢字では「羅米」と書きますが、中国語では「拉米」つまり「拉致」の拉の字を書くのだそうです。メキシコなどで魂を奪われてしまった日本人の間ではラテンアメリカを「拉致米」と呼んだりしますが、あのファベラの元プロデューサーも、「拉致米」された一人と思います。

メキシコのスーパーマーケットで会ったタンゴダンサーで、^{※8}山本満喜子さんという人がいるんですが、大正時代の総理大臣の山本権兵衛という人の孫で、その人がなぜメキシコにいるかというところ、駆け落ちをしたのです。ナチスの海軍将校と大恋愛をして、ドイツはそのころ日本と同盟を結んでいましたが、ヒトラーは内心有色人種を劣等なものと思っているから、腹心の将校が日本人と結婚することを許さない。そこで将校は潜水艦を一隻盗んで（一）、地球の反対側のアルゼンチンに亡命する。満喜子さんも日本から太平洋ルートでアルゼンチンにわたって合流する。そこで男の子が生まれますが、その将校とは離婚して、一人で子供を育てることになる。アルゼンチンにたくさんあるタンゴ学校の事務員として働くのですが、見ていると自分も踊りたくて仕方がない。夜みんなが帰った後のホールで、昼間事務員として見ておいて練習を一人でやって、結局抜群にうまくなくなってしまふ。育児と仕事と学生と一人三役を異郷でやりながら、世界的なダンサーになる。キューバの^{※9}カストロと^{※10}ゲバラにもとてもかわいがられて、ツーショットの写真などたくさん見せてくれました。満喜子さんはカストロの方が好きで、ゲバラの方は「着物を着ているでも自分が裸になつてみたいな気持ちになつてしまふ」男なのだそうです。「危険人物よ」と言っていました。日本がキューバと国交がなかった時代には、マキコ／カストロの信頼関係がほとんど唯一の渡航窓口であった時期もあったそうです。ぼくが会った時は多分六〇代くらいでしたが、街などで遠くで見ると二〇代の女性のようにでした。タンゴで鍛えて姿勢がいい、ということもあるでしょうが、自分がほんとうにやりたいことをまっすぐにやってきた人の、若々しさであるように思いました。ラテンアメリカやインドのような社会では、「人間はこんな生き方もアリなんだ」と思わせる人たちがいる。

異国でいちばん面白いのは、^{※11}バザール、^{※12}メルカードなどと呼ばれる市場ですが、そこでは人びとがちよつとした値段とか品物のことで、朝から夕方まで飽きることなく交渉し、機知を競い熱弁をふるっています。具体的な話はいろいろなところにも書いてあるので省略しますが（「トトニカパンの時間」など）、売る人と買う人の間で交わされる会話の長さは賭けられている金額のわずかさからみると割に合わないくらいのもので、しかも最後には、相手が気に入らなかつたりするみたいなおことで、長時間にわたった交渉の成果を惜しげもなく放棄しておまけしてくれたりします。彼らの意識では、たぶん損得にこだわっているつもりらしいが、無意識にはそういう交渉自体を楽しんでいるように見えます。バザールだけでなくたとえばバスを待つみたいなお時間でも、田舎だったら「午前」に一本、「午後」に一本くるというバスを日だまりで待つ

ているうちに、ペルーでこちらが日本人ならフジモリ大統領に似ているとか似ていないとかいう話題で、すぐにみんなで盛り上がってしまう。バスを待つ時間はむだだという感覚はなくて、待つ時には待つという時間を楽しんでしまう。時間を「使う」とか「費やす」とか「無駄にする」とか、お金と同じ動詞を使って考えるところは「^{※13}近代」の精神で（“Time is money”）、¹⁴彼らにとって時間は基本的に「生きる」ものです。そういえば、¹⁵ぼくたちでさえ、旅でふしぎに印象に残る時間は、都市の広場に面したカフェテラスで何もしないで行き交う人たちを眺めてすごした朝だとか、海岸線を陽が暮れるまでただ歩きつづけた一日とか、要するに何かに有効に「使われた」時間ではなく、ただ「生きられた」時間です。

インドやラテンアメリカのような世界で、非効率で時間が有効に使われないのに永く生きたみたいなきがするという矛盾（第二の矛盾）は、ここでは時間が上滑りしていいこと、時間が「使われる」ものでなく「生きられる」ものであること、だから人生が上滑りしていいということと、関わっているように思います。

遠くから自分の社会を見る、という経験のいちばん直接的な形は、異国で日本のニュースを見る、という機会です。ある朝、小さい雑貨店の前の石段に腰をおろして「午前」のバスを待っていると、新聞売りの男の子がきて「日本のことが出ているよ！」という。日本のアゲオという埼玉県の駅で、電車が一時間くらい遅れたために乗客が暴動を起こして、駅長室の窓がたたき割られた、という報道だった。世界の中にはずいぶん気狂いじみた国々がある、という感じの扱いだっただ。ぼくはその中にいた人間だから、朝の通勤時間の五分一〇分の電車のおくれが、ビジネスマンにとってどんなに大変なことか、よくわかる。分刻みに追われる時間に生活がかげられているという、ぼくにとってはあたりまえであった世界が、〈遠くの狂気〉のようにふしぎな奇怪なものとして、今ここでは語られている。

近代社会の基本の構造は、ビジネスです。business とは business、「忙しむ」ということです。「忙しむ」の無限連鎖のシステムとしての「近代」のうわさ。¹⁶遠い鏡に映された狂気。ぼくはその中に帰って行くのだ。

ヨーロッパの都市の中心には時計がある。都市の中心の広場には、教会があり市役所があり、そして必ず大時計がある。ヨーロッパの人たちはいつのころからか、時計を見上げながら〈近代〉を育んできた。

いつのころからか？ 一四世紀の前半、ミラノ、ボローニヤ、フィレンツェのようなイタリアの諸都市で初めて、「公共用時計」が設置された。一四世紀の後半から一五世紀にかけて、ドイツ、オランダ、スイス、フランス、ベルギー、イギリスの都市に、ほぼこの順番で大時計が設置される。人々が毎日の生活の中で、時間を計りながら生きる、という時代が始まった。時間、というわくぐみの中に、人間たちの生がおかれた。

それでもこの時代の時計は、一本針だった。「分針」というものはなかった。「分」という単位は未だ、生活に必要ななかった。ぼくたちはもう時計といえば、二本針があたりまえです。というか三本針もふつうです。

（見田宗介『社会学入門』より）

- ※1 異化効果…見慣れた事物からその特性を取り除くと、観客はその事物を未知で異様なものに感じるといふ効果。ブレヒトの演劇用語。
- ※2 ブレヒト…Berolt Brecht ドイツの劇作家、詩人。代表作に、『三文オペラ』『肝っ玉お母とその子供たち』『ガリレイの生涯』などがある。〔一九八八年―一九五六年〕。
- ※3 デリー…インドの首都。商業・工業・政治の中心地にして南アジアを代表する世界都市の一つ。
- ※4 ベナレス…ガンジス川沿いに位置するヒンドゥー教の一大聖地。インド国内外から多くの信者、巡礼者、観光客を集めるインド最大の宗教都市。
- ※5 ボンベイ…インド第二の大都市。首都デリーと共に南アジアを代表する世界都市の一つ。
- ※6 リオ・デ・ジャネイロ…ブラジル、リオ・デ・ジャネイロ州の州都。世界有数のメガシティであり、国内最大の観光都市。
- ※7 カーニバル…カトリック教国で、四旬節^{しじゆんせつ}の直前に三日ないし一週間にわたって行われる祝祭。冬の悪霊の追放、春の豊作・幸運祈願に由来し、仮装行列を伴いしばしば狂騒的となる。
- ※8 山本満喜子…山本権兵衛の孫。アルゼンチン、キューバに渡り、カストロと親交をもちキューバ革命を支援した。その後、メキシコにて通訳やカメラマンとなる。
- ※9 カストロ…キューバの政治家、革命家、軍人、弁護士。社会主義者で、一九五九年バティスタ独裁政権を倒し、社会主義をめざすキューバ革命を指導した。〔一九二六年―二〇一六年〕。
- ※10 ゲバラ…アルゼンチン生まれの政治家、革命家で、キューバのゲリラ指導者。〔一九二八年―一九六七年〕。
- ※11 バザール…ペルシャ語で言う「市場」。商店の並ぶ通りのこと。
- ※12 メルカード…スペイン語で言う「市場」。商店の並ぶ通りのこと。
- ※13 近代…西欧において大航海時代などとともに始まり、世界に広まってきた精神と社会の在り方のこと。その中心的な考え方は、世界は精神と物質の二つで成り立つとする。これは、人間の精神のみが崇高で自然（人間の身体も含む）は物質に過ぎないので無価値であるという価値観を含む。この考え方が、全てを対象化し、分析し、改変する近代合理主義の出発点となった。

〔問 11〕傍線部Ⅰ「いったんは離れた世界に立ってみる」とあるが、そのことが必要な理由として最も適当なものを次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 あたりまえだと思つて生きている自分の社会に対して不信感が湧くから。
- 2 前もつて抱いている固定的な観念から離れ、客観的な分析ができるから。
- 3 離れた世界の情報を得て、自国に多くの情報を持ち帰ることができるから。
- 4 離れた世界から見ると、自分の過ごす世界の良さを必ず再認識できるから。
- 5 自分が生きている現代日本社会の肩ばかりを一方的に持たずに済むから。

〔問 12〕傍線部Ⅱ「彼らにとって時間は基本的に『生きる』ものです」とあるが、ここから「彼ら」のどのような考え方がうかがえるか。その説明として最も適当なものを次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 細く長く生き続けるよりも、太く短く生きた方が、充実した人生を送ることができるはずだという考え方。
- 2 楽しく生きていくことさえできれば、時間をお金で買うような物質的豊かさなどは必要ないという考え方。
- 3 生きることそれ自体に意味があり、その瞬間その瞬間が充実していることにこそ価値があるという考え方。
- 4 生きることには楽しいはずで、楽しみを感じない時間があるとすれば死んでいるのも同然だという考え方。
- 5 夢や目的のために努力したり苦しんだりすることは、人生の大切な時間を無駄にしているという考え方。

〔問 13〕傍線部Ⅲ「ぼくたちでさえ」の「ぼくたち」は、ここではどのような人間の例として挙げられているか。内容として最も適当なものを次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 お金と同じ動詞で時間を捉え、時間はお金よりも価値あるものだと言った意識させられている人間。
- 2 その土地で生活を営んでいるわけではない旅人で、普段は近代化された社会の中で生活している人間。
- 3 時間とは有効に使わなければ価値がないという近代の精神を、あたりまえのように身につけている人間。
- 4 異国を旅する中で困難や不便や危険を感じながらも、異国を好きになっているという経験を持つ人間。
- 5 異国の人たちが市場での長時間交渉やバスを待つ時間をも積極的に楽しんでいることに気づいた人間

〔問 14〕傍線部Ⅳ「遠い鏡に映された狂気」とは、どのようなことを意味しているか。その説明として最も適当なものを次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 現代日本の出来事は異国のメディアに映されると、毎朝起こるよくある事件であっても狂気じみた行動として非難されてしまうこと。
- 2 現代の日本とは異なる感覚や価値観をもつ国から見れば、日本の駅で起こった騒動は異常であり狂気に満ちているということ。
- 3 遠い異国のマスコミに報じられた日本の駅での騒動は、日本でもめったにない非常事態であり憂慮すべき問題だということ。
- 4 日本の駅での騒動が異国ならではの価値観によって語られており、わざと日本人の異常さを際立たせる作爲が感じられるということ。
- 5 日本で暮らしていれば大事件にはならないが、価値観の違う異国の新聞だからこそ日本を異常な国扱いするのだということ。

〔問 15〕本文の趣旨に合う説明として適切ではないものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 ブレヒトのいう「異化効果」とは、自明と想ってきたことが「あたりまえではないもの」として見えてくることである。
- 2 インドやメキシコやブラジルに行った日本人は、その国のことを大嫌いになるか大好きになるかのどちらが多い。
- 3 筆者のインドの旅も多くの旅行者と同様スケジュール通りに運ばず、途方に暮れるところから始まったが、不思議な魅力を感じて大好きになっていた。
- 4 異国で、バザールやメルカードでの値引き交渉やバスを待つ様子を見ると、彼らは時間そのものを楽しんでいるように見える。
- 5 広場の大時計が市民の生活を管理することで人々が同じ時間帯の中で生活を楽しむことにつながり、設置以前よりも都市は活性化した。

